

レジメ「霊の父から子へ」 I コリント 4:14-21

2025 年 7 月 20 日 礼拝

導入：誰に倣うべきなのか

現代にはさまざまな「お手本」があふれている。多くの人はインフルエンサーや成功者のようになりたいと願う。しかし、キリスト者が本当に倣うべきは、キリストに従う生き方である。

パウロは「私に倣う者となれ」と語るが、それは派閥のリーダーになるためではなく、霊の父としての愛と責任から出た言葉である。

1. 厳しい言葉の裏にある「父親の愛」(14-15 節)

- 叱責の目的は愛

パウロは、コリント教会を辱めるためではなく、愛する子として諭すために語っている。

- 「養育係」ではなく「父親」

教え導く者は多くいても、福音によって生み出した父親は一人。パウロはコリント教会を自らの霊的な子とみなし、深く思いやっている。

2. 倣うべきは「生き方」そのもの(16-17 節)

- 「私に倣え」と勧める理由

パウロは、自らがキリストに倣って生きているからこそ、他者に自分に倣えと語る。単なる言葉ではなく、キリストに従った実践的な生き方に基づいている(I コリント 11:1)。

- テモテの派遣は「生きた模範」の提供

テモテは、パウロの忠実な霊の子として、パウロの教えと生き方を体現している存在。信仰は知識ではなく、実践によって伝えられる。

3. 信仰の試金石 —「ことば」か「力」か(18-20 節)

- 高慢な者たちの挑戦

一部の人々は、パウロは来ることはないと考え、高慢になっていた。パウロの忠告を軽んじ、自らを正しいと主張していた。

- **パウロの宣言と霊的姿勢**

パウロは「主のみこころであれば、すぐにでも行く」と語り、自分の思いや感情ではなく、主に従う姿勢を貫いている。

- **「力」とは何か**

神の国は「ことば」ではなく「力」にある(4:20)。この「力」とは奇跡や賜物ではなく、キリストに倣った生き方によって神の国を実現させる力である。

パウロ自身がキリストに明け渡された生き方をし、神の国を自らの内に、そして人々の間に表していた(ガラテヤ 2:19-20 参照)。

4. 結論:あなたはどちらを選ぶか(21 節)

- パウロは問いかける。「むちを持って行くことを望むのか。それとも、愛と柔和な心で行くことを望むのか」

この問いは単なる脅しではなく、悔い改めを促す愛の表現。人生の選択を迫る霊の父の呼びかけである。

適用とチャレンジ

- **信仰の吟味**

自分の信仰が「ことば」にとどまり、「力」を欠いていないか。心の中に「偽りの王様」が居座っていないかを省みる。

- **選択の決断**

キリストに人生を明け渡し、神の国の「力」を現す生き方を選び取る。

- **具体的な行動**

日常生活の中で神の国の力を表す行動を一つ実践する(例: 励ましのことば、奉仕、祈り)。

終わりに

イエスは「自分を捨て、自分の十字架を負って、わたしに従って来なさい」(マルコ 8:34)と語った。

パウロも「生きることはキリスト、死ぬこともまた益である」と告白した。

信仰はファッションではなく、人生そのもので証すべきものである。WWJD(イエスならどうするか)を日々問い直し、キリストに倣う歩みを全うする者となろう。